

トンボの話

23生 加藤 正

僕ほど大学に入ってトンボを追いかけてまわ
い！と、宣言してみたりする。(実際、この大学でトンボの
研究をしている人がいらっしやったらすぐに撤回するつもり
である)

ふだんトンボなんてスルーの対象でしかない！っていう人
が圧倒的？でもちよっと目を凝らしてみよう。広大にはいろ
んなトンボがいるんです。それでもってトンボのデザインに
要注目！

夕日み

にレモン色！ってやつもいたりする。だけどこいつらはちい
さくてすばしっこい！

コノヤロウ・・・と思ったらなにやらあっちへヒラヒラ、
っちへフラフラ、

こいつの名前は文字のごとく「チョウトンボ」。チョウみ
いに飛ぶけどれつきとし トンボ！（実は今まゝ 一
か見たことがなくてこんなにたくさんいるのはおどろきの一
言）色は青紫っぽくみえる。ひじょーに美しい！

実 スペイン広場にも2、3羽でやってきて って

このトンボ界ののんびり屋さん植生豊かな池沼に住んで
います。

つまり広大は豊かな植生を育むことができるぐらいののんびりしてい
とてもいい環境の証だったりする。

もしこの広大からチョウトンボが姿を消してしまったら、それは大学
がのんびりした空気を得ることのできない大学になってしまったとい
うことになってしまいうんだろうか？

来年も再来年もこの飛翔な日々「今年もチョウトンボがいます」と
書けるような大学であって欲しいと思います。



「心に着地する言葉」

21生 平野 詩歩

私は小学生の頃から詩を書いてきた。私にとって詩を書くことは、湧出す感情を可 出す

だった。しかし、高校時代に校内の伝統行事である「詩のボクシング」

※

て詩を書くことの意味は、自分の外へ自分自身が様々な分野に関してもった意見や抱いた疑問を発信することへと変化した。

詩は、作者の人生観や書いた時の心情を反映する。それはその人の一部であり、全てである。だからこそ柴田トヨさんの「くじけないで」に書かれた言葉は人々の心にしっかりと響くのである。私が高校時代に書いた片思 の詩が大勢の共感を得たのも、その中の言葉たちが人の心にと着地してくれただからだと思う。

心に着地しいつまでも残るような、良い意味で刺激的な言葉、

の 在していると私は考えている。その言葉を見つ し える

こと、そしてその言葉を自らも生み出すことが、言葉を持つ全ての人に与えられた使命であると私は考える。

※「詩のボクシング」とは

ボクシングリングに見立てたステージ上で、2人の朗読ボクサーが交互に自作品を身体全身を使って朗読し、どちらの声と言葉がより観客に他者に届いたかをジャッジが判定する「声と言葉のスポーツ」、

「声と言葉の格闘技」とも呼ばれている。映像作家で音声詩人の楠かつのりが、平成10年10月に日本朗読ボクシング協会 (JAPAN READING



「夏い暑」

23生 高井 大輔

BOXING ASSOCIATION (JBBA) を発足し、2人の朗読ボクサーが交互に10ラウンド朗読して闘うタイトルマッチが行われたのが、その始まりである。平成12年7月には、

案し、日本朗読ボクシング協会のオリジナル企画として一般参加の「詩のボクシング」トーナメント戦を始めた。これ 詩のボクシング」として広く認知されている。

私の声を聞くと、顔をあげてくれた。

瀬戸内海の島を巡りに自転車で行ったの
2月下旬、よく晴れた空は冷たく澄んでいた。海の上を走り抜けるの、それ 爽快で。島のほのかなミカンの香りがその心地よさを引きいた。女子4人でままチャリをぶっ飛 いら
な旅。次の日どこの筋肉痛よりもお尻の皮が痛かったことは言うまでもない。

1人のおじいさんの話をしたいと思う。

ある島で、上陸して走りつづけるもの人がいない。あるのはみかん。みかん。みかん。そして海。朝から走り続けていたためお腹がすいてい。なんでもいいから店に どり い。 で いて
と、前方に人陰が見えた。もう次の島までごくしないと諦めかけていた私たちにはその陰がきらつきらして見えた。

近づくにつれてその人がおじいさんであるとわかってきた。背は低くて痩せている。もんぺのようなズボンに、トレーナーをだぼつと着て、ヨッキを羽 を

「すみません!!このへん食べるとこありますか?」

おじいさんは、腰は曲がっているものの1人でポツポツ歩いていった。歩幅は小さくて足取りもぎこちないけれど、確実に地面を踏んで、ゆっくりと、しっかりと。

杖や押し車は使わない。両手をしっかりと

「どこからきたの?」

「尾道です」

「ほうねえ?」

「お昼食べたんですけど、どっかお店ありますか?」

「ここをねえ:」

強烈な広島弁で、もう少しいけばお好み焼きがあると教えてくれた。すぐつくりしい。

「ありがとうございます!」

そしておじいさんはまた、ゆっくりと足を踏み出した。

そこで初めておじいさんの背中を見た。繫いだ両手を支える背中は、小さくてたより無さそうだったけれど、青い空と海と広大なミカン畑にむかって、右、左、右、左、と進んでいく姿はどこかたくましく、どこか勇ましく見えた。

のくらいいだろうか、空腹と期待から私たちは変わらなず無言だったのだが、未だみかんしか見当たらない。数十分後にやっとたどりついた。

走りながらわたしは思った。おじいさんはあれからどこに向かっ

たのだろう。見る限りはみかんしかなかったのに。そして、あの速さでく

このママチャリの旅でこのおじい
み焼きの場所と、

地に足つけて、信じて進み続けること。

「秘密のゲーム」

23生 益田 征哉

ここはとある大学生の家である。ここに、大勢の人達が集まってい
。 どうも合班を 班ば を

て沈黙する者、軽くしゃべる者といった。もう一方の班はなにやら動き
回った後でしばらくしてお互い何か話したようだった。

そしてAでない誰かが「Aです」とAみたいな口調で一声上げる。す
とA以外の誰かがまた「違うって、違うって」と う A みた
な口調で言う。さらにAが「フェニクス」とみよーな発音で一声上げる。

方の班は顔を上げて言う。「3番目がAだ」「えっ、1番目がAじ

いの」とそれぞれ言い合う。話し合った結果「3番」と答えを合わせる。

正解」とAのい

これは「Aゲーム」と呼ばれる。このゲームはこんな風にAという人
間を声であるものである、Aの声は特徴があるため、このゲームは生
まれた。

「じゃあ、もう1回いくよ」とAの居る班員の1人は言う。ゲームは
再び始まった。「違うって、違うって」と真ん中辺りが変にあがる声が
聞こえた。「フェニクス」という前の辺りを強くする声が聞こえる。「A
です」という少し照れ隠しのような声が聞こえる。「フェニクス」とい
先ほどの発音とは異なる の
Aです」と少し

か」と暫く悩んで「うーん、どれがAかって言われても……」
「ひよっとしてAはあの中にはいなかった」

……Aは静かに笑っていた。

*この話は若干のフィクションを含んでいます。

23生 金子 久誉

僕は今年になって初 て
生まれも育ちも広島で、小学生のころからずっと平和学習をしてきた
も、式典に参加したことはなかった。

式典を見るのはいつもテレビ越しで、時にはまだ夢の中ということも
あった。僕の実家は平和公園か 10 かか
たのに、式典に参加しようという気は起こらなかった。それだけ、平和
について興味がなかったのだ。

時間の制約という理由もある。小学生のころから野球をしていて、夏

みは肌を真つ黒にして、朝か に
習が午後からで午前中があいでも、式典を見て黙禱をささげるのは
テレビ越しだった。

そんな

に参加することができた、いやしようと思った。そ

、平和について 真剣に考えるにつ

ここで話をもどそう。式典では広島市議会議長、藤田博 式

中で、

「私たちはこれからも、被爆の実相と平和の尊さを訴え続け、平和を希
求する人たちと共に手を取り合って、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実
現のため、全力を尽くすことを、ここに改めてお誓い申し上げます」
と述べた。

広島は毎年世界に向けて、核廃絶を訴え続けている。

絶望しか残らない核兵器など、この世から存在しなければいいと

。だけど、 ———と

核保有国は、核

は、核

たして被爆の実相と平和の尊さを訴え続けられ、核兵器はなくなるのだ
ろうか。アナーキー（無政府状態）と呼ばれる国際システムの中で本当

核廃絶

有効策）が いてきていない

更にこの言葉では、世界恒久平和の実現がう

ころからも、平和学習でこう習ってきた。確かに、世界が平和になれば、

んなが安心して し

がて し し

が

になる前に、日本が平和にならなければならないということを、多くの

は見落としている。平和を訴 平和
るのは当然のこと。それを踏まえずに平和を主張しても、今までの平和
宣言のように虚しく終わってしまう。

思考を停止して無闇に平和を訴えても、その声は届かない。僕たちが
日本人としてやることは、日本を、そして世界を平和に導く真の方法を
考えることではないだろうか。そして学生として僕たちがやるべきこと
は、平和について多く議論を重ねていくことだろう。平和式典はそのこ
とをいろんな人にも考えてもらうチャンスであると思っている。

